

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	Dilu Shaleka Teshome
論文題目	Projecting Continuity, Embracing Diversity: The Experience of Religious Change by the Sidama People of Ethiopia（連続性を見据え多様性を受け入れる人びと—エチオピア・シダマ人による宗教的変化の経験—）		
（論文内容の要旨） 本論文はアフリカにおける伝統宗教の変化の特質を、エチオピア西南部の農耕社会を事例に、地域に暮らす人びとの観点と経験をもとに検討するものである。これまでの民族誌的研究において、エチオピアのシダマの人びとは、もっぱらプロテスタント信者であり、集団的な改宗によって伝統宗教はほぼ捨て去られ、遠隔地に住む保守的なシダマのクランに限定的に残存していると記されてきた。本論文は、このような指摘が、シダマの人びとの宗教的生活の実際を映し出してないことを見いだしている。集約的な民族学的フィールドワークと宗教変化に関する人類学の諸理論に基づいて、これまで述べられてきたよりも伝統宗教がはるかに優勢であることを論じている。 論文の資料を得るためのフィールドワークは計 11 ヶ月間、エチオピア・南部シダマの農村部で実施された。調査対象地域は、従来から宗教に限らず伝統とその継続性が注目されてきたところである。この農村地域における、祖先崇拜の社でおこなわれる宗教的活動を観察した結果から、伝統が新しい諸宗教から教義や慣行を積極的に取り入れていることを明らかにするとともに、この地域の人びとが最も伝統的であるという従来の指摘は誇張であると述べている。むしろ、人びとは積極的な革新者であり、これまで言われてきたよりも新しい状況によく適応してきたということを明らかにしている。 第 1 章では、アフリカにおける伝統宗教の変容と新宗教の受容に関する研究を概観し、その課題について提示している。また、本論文の事例となる地域について、その民族誌的、歴史的、および地理的背景を論じている。 第 2 章では、エチオピア、そしてシダマ地域にとって特に重要な歴史的進展の概要を、帝政、社会主義政権、現政権の三つの政体に分けて述べている。歴史的観点からは、外来の宗教がシダマの宗教に影響を与えた時期と出来事について考察している。特に、シダマ全体および調査地にどのように外来宗教の影響が及んだのかを示すために、国家レベルと地域レベルで交互におこる政治的变化について精査して、シダマの様々な宗教集団が、それぞれの政治体制下でとった異なる対応を明らかにしている。 第 3 章では、シダマの伝統宗教の概観を行い、宗教的背景の変化とその過程を検討している。また、伝統宗教の内部における宗教的变化をもたらした外因と内因、およびキリスト教とイスラームへの改宗に対する地域固有の認識について明らかにしている。 第 4 章では、Aabbo と呼ばれるシダマの祖先崇拜の場における宗教実践の事例をとりあげ、民族誌的な記述をおこなったうえで、宗教伝統の継続性について議論してい			

る。特に、伝統的要素の継続に対する、シダマの祖先崇拜の影響と地域住民の反応をとりあげて論じ、Aabbo が地域社会に果たしている今日的な役割の重要性を指摘している。

第5章および第6章では、第4章で検討した Aabbo におけるシダマ祖先崇拜伝統が、変化する側面に注目して論をすすめている。

第5章は、地域社会における様々な紛争において、Aabbo に代表される伝統的宗教実践が、法的な規範による規制と人びとの生活のあいだに介在して、その解決に貢献するようになった変化の過程を事例に基づいて描き出している。

第6章では、森林資源の利用をめぐる対立する関心や解釈を調整する新しい機能を Aabbo が果たすようになった結果、伝統の重みを示すものとして Aabbo の宗教的な森が成立していることを明らかにしている。

終章では、これまでの議論を総合して、シダマにおける宗教的变化の経験が必ずしも単純な伝統からの乖離を意味するものではなく、むしろ現実には新しい諸宗教の多様な要素を積極的に組み入れることによる伝統の再創造であり、先行研究が指摘してきたよりも非常に強固な「伝統的なもの」の継続であると結論している。

(論文審査の結果の要旨)

宗教の変容を扱う研究においてアフリカ伝統宗教の盛衰は、常にキリスト教やイスラームなどの外来宗教との関連において問題化されてきた。外来の宗教が伝統宗教に置き換わり、場合によっては伝統宗教の要素をとりこんで土着化するという過程がこれまで多く研究の対象となってきた。本論文は、このような外からの眼差しをいったん留保して、地域研究の立場から伝統宗教の変化の特質を、エチオピア西南部のシダマ農耕社会を事例に、地域に暮らす人びとの観点と経験をもとに描き出そうとした新しい試みである。また、本論文は、宗教とその社会的背景の変化の過程を検討しつつ、エチオピアという多文化多民族状況のなかでの伝統宗教の具体的実践の変化を追い、その変化をもたらした外因と内因について明らかにしようとする挑戦的な試みでもある。

これまでの民族誌的研究において、シダマ社会はもっぱらプロテスタント信者であり、集団的な改宗によって伝統宗教は衰退し、辺境に住む保守的な一部のクランにのみ残されているとされてきた。本論文の前提となる重要な学術的貢献は、このような先行研究の認識はシダマの人びとの宗教的生活の実際を映し出してないという指摘を、長期のフィールドワークとアフリカにおける宗教変化に関する人類学・民族学的研究の検討に基づいておこなった点にある。

本論文の内容は、以下の3点において、高く評価できる。

第一に、Aabbo と呼ばれるシダマの祖先崇拜の場における宗教実践の民族誌的な記述をはじめておこない、その宗教伝統の歴史的な継続性を、エチオピアの帝政、社会主義政権、現政権の三つの政体の変遷と関連づけて示したことは貴重である。特に、調査地周辺地域だけでなく、シダマ社会全体にどのように影響が及んだのかを示すために広域調査を行い、国家レベルと地域レベルで交互におこる政治的变化について精査したうえで、シダマの様々な伝統宗教集団が、それぞれの政治体制下でとった異なる対応を明らかにしたことは、これまでの伝統宗教研究にはみられなかった視点である。

第二に評価できるのは、変化の過程に注目し、その今日的な意義を二つ指摘したことである。具体的には、伝統的要素の継続に対するシダマの祖先崇拜の影響と地域住民の反応を参拝の記録と直接観察によって得た資料をもとに論じ、Aabbo に代表される宗教実践が、地域社会における紛争解決などの場面で法的な規範による規制と人びとの生活のあいだを媒介する役割を果たすようになったという指摘である。また、Aabbo が森林資源の利用をめぐる対立する関心や解釈を調整する新しい機能を果たすようになった結果、Aabbo の社を取り囲む人工的な森林が成立しているという指摘である。

第三に評価できるのは、伝統宗教がプロテスタントやイスラーム主義などの新しい外来宗教と比してもはるかに優勢である状況を、調査対象地域の保守性に起因するも

のと解釈するこれまでの一般的理解から脱して、祖先崇拜の社でおこなわれる宗教的活動の観察をもとに、周辺諸民族が信仰する諸宗教から教義や慣行をむしろ積極的に取り入れている実態と結びつけて解釈した点である。申請者は、シダマの人びとが積極的な革新者であり、これまで言われてきたよりも新しい状況に柔軟に適応してきたという評価を下しているが、地政学上の辺境に位置するシダマ民族が、南部諸民族州の盟主として政治的ヘゲモニーを握っている現状と符合する優れた分析である。

本論文は、エチオピアの一民族シダマを扱いながら、アフリカにおける宗教的変化の経験が、必ずしも単純な伝統からの乖離を意味するものではなく、むしろ現実には新しい諸宗教の多様な要素を積極的に組み入れることによって、「伝統」を強固なものにしていく可能性があるという点を指摘した。宗教実践に対する地域研究からのアプローチとして先駆的な意義を評価したい。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 24 年 2 月 6 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。